

北の国から

北海道立子ども総合医療・療育センター

五十嵐 敬太

初めまして、北海道のこども病院で小児血液腫瘍内科医をしています五十嵐敬太と申します。私は大学卒業前より小児血液腫瘍の分野を志していましたが、自身の伴侶とは大学 NICU で出会いました。新生児医療についてご指導いただいていたはずが、その後も人生についてずっとご指導されることとなりました。

大学で1年研修後からは、北の国の港町を巡り、地域の基幹病院で小児科医療全般に夫婦で従事しました。夫婦が同じ科で働いていると1/2 2/3 の日はどちらかが on call 日なので、頻繁に呼び出し携帯の音家が鳴っている状況でした。当時は同じだけ働いていたにも関わらず、料理ゼロで家事もあまりしていなかったことを今思い返すと妻に大変申し訳なく思います。（本日は帰宅後、肩を揉んで阿りたいと思います。）

2006年に娘、2009年に息子を授かり、妻がその都度産休・育休を取得しました。長期間休んだ後も、専門性のある知識とスキルを妻が維持していたことを尊敬するようになりました。

2010年に大学へ異動、私が志望していた小児血液腫瘍チームでの仕事が始まり、前後して妻も大学 NICU で勤務となりました。この頃が一番大変だったかもしれません。当時は頻回の当直（月7回！）や地方出張等で、家に帰れる日が月の半分もありませんでした。その状況で妻も NICU 当直をしていたので、どのように生活が成り立っていたのか今では思い出せません…。保育園の送り迎えも陸上のバトンリレーのようにギリギリを攻めていました！

転機は基礎研究に従事した2013年からの3年間でした。それまでより時間に余裕が生まれ、人生で初めて料理らしきものを開始。毎朝朝食を作り（かなりワンパターン）、送り迎えをして、参観日にも（他のお母さん方からは不審な目で見られつつ）ほぼ参加しました。私にとって人生で最も子ども達と関わることができた大きな喜びの期間でした。また、ほとんど何もしていなかった家事の端緒となりました。

2016年から臨床メインへ復帰後、再び妻の負担を急増させてしまっていますが、お互いの負担を色々な手段で減らしたいと考えるようになりました。ルンバは必須（ルンバのために片付けさせられている感もありますが）、時には外食（コロナで減りました）やUberで食事を乗り切ります。娘が成長したので、K POP への資本導入をエサに洗濯を主に担当してもらっています。繁忙時に短時間で作成可能なパポリタン（パパの作るナポリタン）、パスタ（パパがパパッと作る鯖缶パスタ）も子ども達から結構リクエストしてもらえるようになりました。

夫婦がそれぞれ小児血液がん専門医と新生児専門医として、大学病院やこども病院で長らく勤務しキャリアを築くことができたのも、今までの同僚の先生方や医局のご理解とサポートのおかげかと考えています。現状、家事のウェイトはまだ妻の方が私よりずっと大きいので、今後もカリン塔を登るように修行いたします。また「チーム医療」重視の時代に習い、娘息子も巻き込んで「チーム家事」を推進していきたいと考えています。

卒後 20 年が経ち、学ぶことだけでなく、遺していくものも大切に考えなければならないと思うようになりました。助けを必要とするひとりのこどもの笑顔の為に、これからも歩み続けたいと思っています。

<著者略歴>

五十嵐 敬太（いがらし けいた）

小児科医、小児血液腫瘍内科医

家族は妻一人（新生児専門医）、高校生娘一人（CARAT）、中学生息子一人（思春期）

2003 年 札幌医科大学卒業→小児科入局（ストレート入局最終世代）

2004 年～2010 年 北海道港町の地域基幹病院を巡る（釧路→函館→小樽）

2005 年 小児科医の先輩と結婚（釧路）

2006 年 娘誕生（釧路）

2009 年 息子誕生（小樽）

2010 年 札幌医科大学小児科血液腫瘍班（サブスペシャリティ選択）

2022 年 札幌のこども病院へ異動

～ダイバーシティ・キャリア形成委員会より～

「産後パパ育休、の前に」

令和 4 年 10 月に「産後パパ育休制度」がスタートし、既存の育休制度とは別に、男性が子どもの出生から 8 週間までに、合計 4 週間の育休を 2 回まで分割して取得できるようになりました。既存の育休制度も 2 回まで分割して取得でき、男性は育休を子どもが 1 歳になるまでに最大で 4 分割して取得できます。「産後パパ育休」期間中も労使協定と個別の合意があれば部分的な就労も可能で、取得申し出が円滑に行われるように事業主は複数の措置を講じるべきとされています。

制度開始から 1 年以上経ち、皆様の職場での取得状況はいかがでしょう。「具体的に何をしたらいいかわからない」という理由で取得をやめた先生もいるでしょう。ある調査によると、育休を取得した男性の多くが「妊娠中からの準備が必要」と回答しています。早めの職場の勤務調整・相談だけではなく、家庭内でどんな役割が果たせるか、家庭内のコミュニケーションが産前から必要かもしれません。漠然と取得し女性側から「育児のためではなく自分のための休みのようだった」と言われることは「ありがち」だそうで、パパママ職場の 3 者とも不幸です。育休取得の前から家事の見直しや家族の会話の大切さ、そしてぜひ料理のレパートリーが少ないと振り返るパパ先生は、まずはパスタと鯖缶を買ってきて五十嵐敬太先生の「パスタ」を作ってみませんか。